

【第七五回例会 関敬吾の口承文芸観】

関敬吾伝説

野村 敬子

一、戦争と昔話集

関敬吾は「東のライオン伝説」渦中の人物であった。激しく、雄々しい、妥協を許さぬ理論家であるという。その方から逢いたい旨の書状を頂いた。昭和四十八年頃であった。私は『どんぐり』と山猫』の主人公のような気持ちで、東京大学の研究機関という病院に入院中の関敬吾を訪ねた。「東のライオン」は小柄な方であった。

その日、私は関敬吾と初対面であった。が、既に仕事の縁は頂いていた。師（白田甚五郎）が「木曜会」仲間という縁で、私は関敬吾訳・アザトウスキー著「あるシベリアの昔話の語り手」の原稿清書を引き受けていた。<sup>(1)</sup>

呼び出しは関敬吾訳の同書出版に関わる用件かと出向いたが、全くの別件であった。その折の印象記は『国際化時代を視野に入れた説話と教科書に関する歴史的研究』（研究代表 石井正己）

「第三部 東アジアの昔話研究の歴史と未来」に「関敬吾先生の思い出」として、極めて情情的に記した。<sup>(2)</sup>

その日、関敬吾は意外な問いかけをされた。「貴女は慰問袋を知っていますか？」と。勿論。昭和十三年生まれの少国民の私は認識していた。「小磯国昭を知っていますか？」小磯国昭は太平洋戦争中の山形県人、新庄市の高校に学んだ者なら、誰でも承知する軍人である。新庄ゆかりの拓務大臣、総理大臣を務めた人物であったが、東京裁判中に病死、お墓が新庄市西山にあると聞いていた。

「そう、知っていますか。それでは頼みやすい」と、そこで私は思いがけない頼まれごとを引き受けることになった。

依頼は「戦地から帰還した人から慰問袋に昔話集が入っていたか。を聞き取ってほしい。特に小磯国昭が勧めた民族協和、日満同昌共栄、満蒙開拓義勇軍の人たちから、慰問袋のことを聞いて下さい」というものであった。私が故郷で昔話定位置置観察を始めて、繰り返し山形県北部に通うと聞いている依頼という。その時伺ったお話と同じと思われる記載が『越後の昔話 あつたとさ』の『あつたとさ』の思い出に残っている。言葉の正しさを記したいと思いつきに引用する。

〔昭和十六年の九月〕この本の一部は大陸の第一線に勇戦する我郷土部隊の兵隊さんに頒ち、そのご苦労をねぎらひ、又一部は我郷土の療養所に病を養ふ白衣の勇士の方々に呈して、御再起の日の一日も早からんを祈る。とある。そうして、北に南

に遠く家郷を離れた方々からの感謝の手紙のなかに、ただ一つの方言になんとも言われぬ懐かしい、嬉しい胸の内がジーンとなるような気持ちにしばしばひたつたという言葉が紹介されている。(略) 私は柳田先生のもので『全国昔話記録』の編集にたずさわったことがある。その第一巻を戦時中の十七年三月に刊行し、祖国の運命が逆賭しがたい段階に追いつめられた十九年三月に不吉な数の第十三冊目を発行して中止した。昔話集は戦前はせいぜい四、五百冊が最高の売高だと噂されていた。ところが、出版用紙の統制下にもかかわらず、予想もしない三千部の中には五千部の用紙がわりあてられた(と知った)。その理由は、私には不可解であった。ところが戦後になって、はじめてわかったことであるが、この昔話集が慰問袋にいれられて、前線の将兵のところに送られたということであった。<sup>3)</sup>

私に依頼したいことの一つは十三冊の昔話を戦地で手にした兵士を探して欲しい。加えてもう一つ「満蒙開拓少年義勇軍の生き残りにも」という依頼であった。関敬吾は柳田国男と農村更生協合理事長・石黒忠篤の依頼で満蒙開拓少年義勇軍の慰問袋作戦のために少年向け昔話集の原稿を作り提供したのであるという。

義勇軍とは「国家によって直接組織される軍隊である正規軍隊に対し、武力紛争に際して一般市民が戦争に参加するための自発的に組織した団体」である。義勇軍の国際法上の地位が認

められたのは明治四十年の「ハーグ陸戦条規 第一条」による定義が確立している。そこでは「一人の責任を負う指揮者の存在・遠方から認識できる特殊な証票を身に着けていること・捕虜の虐待をしない・捕えられても捕虜の扱いを受けない」などの戦争の法規や慣習に従うことが約束されている。この軍事的約束事に小学生たちが組み込まれた。昭和十二年十一月三日に「満蒙開拓青少年義勇軍編成にかんする建白書」が出されている。大蔵公望満州移住協合理事長以下、石黒忠篤、橋本伝左衛門、那須皓、加藤完治、香取昌康の連名で提出された。それは十二年一月三十日閣議決定されている。「凡そ皇国の真の困難は外敵の如何にあらずして国民思想の健全に存す。政府の国民精神総動員を提唱する所以は亦之に外ならざるべし。然るに今日の国内情勢は、青少年の精神を鍛練陶冶し、其の士気を愈々旺盛ならしむべき環境に乏しく、銃後において動もすべし。第二義的活動に心身を消耗せんとする実情にあり、青少年義勇軍は斯かる危機を転じて真に国民精神を作興する一大国民運動たらせんばあらず」と満州行を「青少年一般に及ぼす精神的効果」と位置付け「之を現在我国人口構成の統計に観るに満十五歳以上十八歳の農家大弟大約七拾萬を最す」憂慮を満州開拓に向けて求めるの巴むなきもの大約七拾萬を最す」憂慮を満州開拓に向けて解決する「銃後報国」の筋道が打ち出されている。

第一次二二、〇四三名、第二次八、六六五名、第三次一二、〇九一名、第四次一二、五七九名、第五次一一、七九五名、

第六次一〇、六五八名、第七次七、七九九名、第八次三、八四八名。総計八九、四七八名が応募して満州にわたった。

満州問題に深く関わる石黒忠篤農村更生協会理事長は柳田国男の郷土研究会以来の親友であった。柳田国男が「民間伝承の会」顧問にと名前をあげて深く関わった人物と知られる。それらの状況下、軍隊に加えて満州向きの昔話をと求められ、関敬吾は原稿を作つて渡した。そこには断れない、時の風が吹いていた。世に銃後慰問袋作戦があった。

満蒙開拓青少年義勇軍には特に、慰問袋作戦が展開していた。子供たちが慰問袋で慰められると、国を挙げて慰問袋を作り送り出す機運があつた。新橋芸者たちの慰問袋を出す姿が新聞に写真入りで報道された。関敬吾の昔話集は東北、信州、広島の昔話を中心にするようにと配慮があつたという。その地方から子供たちが多く出征したからであつた。石原莞爾、満州浪人大川周明もいる山形地方は特に満州熱の高い土地柄であつた。その山形県では、私の故郷・真室川の昔話（鮭延瑞鳳の「昔話研究」投稿）もその集に入つていたと知る。

## 二、戦中の関敬吾

病床の碩学から意外な依頼を受けてから、私は山形県北探訪には必ず帰還兵たちの話を聴いた。が、昔話集を見たという人には逢うことが無かつた。帰還した人物は言つた。

「我々は騙された。大騒ぎで送り出しておきながら全く知らぬふり。手紙は一本も来ない。兵隊さんに慰問袋は来るが我々には来ない。送られる時は全く兵隊と同じであつた。何も話すことは無い。特にリンチ事件などもあり、多くの同胞が死んだ。もう忘れない。話すことは無い。」と口をつぐんだ。縁を頼つて尋ねた先には仏壇に満州帽を被つた少年の遺影があつた。多くの命と未来が満蒙政策に潰えたことを追認させられた。他の帰還兵のほとんどは無言であつた。

私は致し方なく、報告のために身近な人から、無理に聞いた話もあつた。その中で関敬吾が強く反応したものは所謂「兵隊話」であつた。中国からフィリピンにわたり九死に一生という高橋寿雄・通称トシさんは私の生家で番頭をしていた。「兵隊話」の達人であつた。関敬吾作成の昔話集は部隊に来なかつたが、兵隊たちは中国でよく話をしていたという。

「歩哨に立つ晩には変わりばんこにストーブに火どつて、暖をとつたが、その時が怪談の時だつた。死んだ筈の戦友がストーブに毎晩あたりにきた。腕を失つた兵士も一緒にあつたが、毎晩寝ると腕の痛みで苦しんでいた。めざめて腕が無いことに気付く。亡霊痛というのださうだ。亡霊や姑獲鳥のはなし。「こんな晩」もあつた。憎い上等兵に飯上当番になつた時、頭を掻いてフケを入れてフケ飯にして食わせた。たいいてい気分が悪くなつて吐いたりしたものだ。その上等兵は進軍した先で亭主の前で妻を犯す自慢話をした。凍傷で足を切つた軍人は相模原陸軍病

院に送られた。凍傷になって内地に帰りたくて外に出て、全身が凍って死んだ者もいた。」

身近な話者の不毛な「兵隊話」を聴いて書き留めて持参したが、関敬吾は実に熱心に聞いた。そしてその類話を捜すようにと、ご指導下さった。「世の中になった一つという話は少ない。そうした資料には注意しなさい。例えば佐々木喜善の昔話のような」と。「兵隊話」中には「関・昔話カード」に対応するものがあつたらしい。

後年、私は「まずらたけおの昔話<sup>(4)</sup>」を書くことになり、夫の前で妻を犯す話は「カタールサリット・サーガラ」やソロモンの警え話、『今昔物語』巻二十九第二十三、また大岡昇平『俘虜記』にも上官の自慢話に同系の話の存在を知るところとなつた。外国類話を知る上で関敬吾の広く深い世界に想いが及ぶところであつた。或る日、「兵隊話」に「姑獲鳥」と「こんな晩」が含まれていたので、山東京伝『安積沼後日仇討』や夏目漱石『夢十夜』に類話を探して持参した。「国文資料にありましたか。そうですか。日本文学は難しい。殺す話はよほど注意深くしないと」と、即、カード記入をされた。

令和元年、劇映画「アルキメデスの大戦」が公開された。この主人公・山本五十六のエピソードが「兵隊話」に折り込まれている。柳田国男は「山本五十六が戦陣で越後の昔話集を喜んで」という話を知って、慰問袋戦術を思いついた」と関敬吾は考えていた。「新潟県中頸城出身の黒崎林蔵海軍大佐に山本五十六

連合艦隊司令長官に伺候せし折、こんな面白い本が贈られたが読まないかね」と。これも五十六エピソード・「兵隊話」の一つかも知れないが、柳田国男を強く動かした伝聞に違いない。「戦時下にあつては一切の物資が統制下に置かれていた。出版物もまた戦争遂行の緊急度に応じて用紙は割り当てられた。誰が考えても昔話などは閑文学である。平時でも昔話は五、六百部売れたら最高であると噂されていた。」と、「島原半島昔話」の「編者ノート」に「戦後聞いたことであるが、この小冊子が三千部、後の版は五千部の紙が配給されている。(略)これが慰問袋に入られて前線の将兵のもとに送られていた<sup>(5)</sup>」と記し、最初三千部から満蒙を含んで昭和十九年五千部の出版用紙を割り当てられた背景に、山本五十六の話があつたのではと、戦後になって想い至つたとしている。

これら昔話集を編んだ時代の関敬吾は、その人生を柳田国男に預けていた、と私には思われる。ちなみに私の手元には関敬吾自筆の「履歴書」がある(名著出版関敬吾関係の仕事を手伝っている時に頂いた記憶があるが、遠野図書館にも同じような開示書類があつたのでここに示す)。

昭和十八年に東京帝国大学図書館司書を退職し、叙勲八等綬瑞宝章。文部省民族研究所嘱託として働いている。一方で、日本放送協会嘱託で「日本昔話名彙」「日本伝説名彙」の編纂のための基礎的な仕事。資料収集とカード作成の陣頭指揮にあたっ

た。カード作成には戦争で出征の男性たちに代って、「女の会」の柳田門下生があたった。一方、昭和十八年に関敬吾は「東方民俗研究会」に所属してもいる。所属は「東京、民間伝承の会」となっている。その顧問は「周作人、坂本龍起、永井潜、柳田国男、折口信夫」「役員 会長 別所孝太郎」とある。会員は五十五名。関敬吾の名前は五十四番目に記されている。事務所を当分北京市東昌胡同一號東方文化聡委會内に置く」とある。

その会則趣旨には「今や東亜新秩序建設力新シキ段階ニ達シ將二一大飛躍ヲ遂ケントスル秋ニ當リ、文化建設ノ基礎要件タル中華民國ヲ中心トセル東亞諸国民族ノ言語、習俗ノ科学的調査研究ノ緊要ナルコトハ言ヲ俟タス」とある。直江廣治、澤田瑞穂が幹事に名を連ね、國學院大學の藤野岩友、新京建国大學の大間知篤三も参加している。戦後に民俗学を学んだ私には学問の通りぬけた時代観を見落としがちである。マルクスボーイであったと記す関敬吾の戦中にも、重い時代を生きた足跡を忘れてはならない。

関敬吾はその後より大きな「財団法人 日本文化中央聯盟」に嘱託として所属している。ここでの仕事は満鉄が収集した膨大な世界資料を整理、読み解くことであった。柳田国男の指示によつての移動であったというが、柳田国男と親しい貴族院議員、國津會の松本学の強い求めがあったさうである。関敬吾の戦中は、誠に柳田国男の存在抜きでは考えられない濃い戦時がある。この関わりの深さは何であろう。戦後もまた関敬吾の歩

き方に、柳田国男の強い関わりが纏綿する。柳田国男推薦で、関敬吾は敗戦後も忙しい。GHQの日本社会調査に「聯合軍民間情報教育局輿論及社会調査部学術顧問」になりH. Parisinたちと農山村漁村社会経済調査に従事、その後沖繩調査の学術顧問に就いている。「日本民俗学入門」の思い出<sup>6</sup>に関本人が記しているので参考にされたい。

### 三、孤高のライオン

関敬吾は語っている。

「昭和二四年学会理事に推挙されました。翌年二五年九月三十日に日本大学で行われる「日本民俗学会第二回年会」の講演を引き受けました。「日本民俗学の根本問題」と題して考えを述べた。その内容には「民族学の中の一国民族学としての民俗学」を想定し、満鉄東亜経済研究所が集めたアジア資料の活用、蔵書二万三〇〇点は福島市に疎開させて、戦後国会図書館に譲渡されていた。それらは英、仏、米、蘭などの植民地支配も如実にわかるものである。加えて戦後調査のアメリカが統計やアンケートを駆使してする調査方法、民俗社会の問題なども調査研究に取り入れたらよいのでは。単に調査資料を並べるだけではなく。石田英一郎君が扱っている「民俗社会」と民族・種族の見地を取り込もうではないか。と、言った時です。柳田先生が『そんなことを外で言ってもらっては困る。君。言うことにもほ



どがある。止め給え』と、その先を遮りました。先生は方法論については言わない。東洋人の考え方とヨーロッパ人の考え方の違いを知って居られた。東洋人の直観による考え方。理論的に詰めて行くのではなく、直観力で帰納的に論じていくのです。僕がそれに碍ることを言っただけです。」

関敬吾のこの言葉は遠野博物館所蔵「後藤総一郎との対話テープ抜き原稿」から写したものである。私は同じ言葉を幾度か聞いていた。このときの緊張した学会の様子を岡田照子（女性民俗研究会会員）からも聞いている。会場は硬直して、誰もが緊張の極限にいた。身動きできない緊張感であった。と彼女は伝えている。今で言うならば「本音と建て前。空気を読みなさい」ということであろうか。が、柳田国男の命令のまま所属を変え、それを信じて全うに生きた関敬吾にとって、師の言葉は想定外に違いなかった。侵略戦中、独逸語訳の「シツディクル」を柳田国男に翻訳を勧められた仕事から、よもやアジア資料を黙殺するなど考えが及なかった。加えて敗戦後も迷うことなく戦勝国の調査に、師・柳田国男に従った。今こそ、それを活かして研究が出来ると思える全うさに、私はその話を思い出す度に胸が熱くなる。

特に忘れられないのは、島根県の山林王の山林調査をしていた昭和二十五年に、GHQから突然命令が下って全ての調査は終了となった。その時、関敬吾はアメリカの日本に対する本当

の統治政策の変化を見てとったようである。調査終了でアメリカは日本体質の主要な一部分を温存・例えば山林王のような大きな意味では天皇制の国家体制を温存して、その動線力学をGHQが担う管理を考えたと、調査資料結論の動線を読み取ったと私は考えている。

GHQのバーコフという人物から「キング」改め「富士」誌を廃刊にしたらどうか? という諮問があつた。当時の百万部雑誌であつた。都会に読者が多いが食糧難で米・農業のテーマが扱われる。関敬吾の答えはふるつていた。「世界から日本人の農業を考える雑誌。米を作る人と食べる人が同じように米をだいにする。拜んで米を作り、拜んで食べるのが日本の米だ」と答えた。相手は「解つた」と言つたとか。関敬吾という人物が民俗と民族の学問の徒であると理解できる。学問の壁を超えていく時機到来を大きな意味で感じ取つていたに違いない。学問に「もしか」はあり得ないが、戦争中の資料の活用利用が叶えられたらと、思うのは私だけだろうか。

敗戦後処理を巡る学問の問題として、柳田国男の逆鱗問題を考えることができよう。

民俗学会での関敬吾講演は記録されることはなかったが、この言葉には戦中戦後の柳田国男の指示・命令抜きには考えられない関敬吾の生きざまを映しだしている。その言葉の純粹さに関敬吾の柳田国男への尊敬の深さ、純粹さ、師の志向する研究についての信頼、子供の如き無垢、迷いの無さが表出している。

戦争中の日本国が中国やアジアに向けた植民地政策における東亜研究に関わった研究者たる生き方、また敗戦後に柳田国男の推薦でつとめた「連合軍民間情報教育局（CIE）輿論及社会調査部学術顧問」として、長期間在籍し、アメリカ流の方法論を学び、農地解放などの基礎資料作成につきあった。山林解放のための基礎調査は朝鮮戦争勃発によって中断したが、その時、島根の山林調査をしていたが、気が付けば継続調査をしている日本人は関敬吾独りであったという。関敬吾にとって日本と全く違うアメリカの調査方法を知るとは、戦争の勝敗とは別のものであった。戦中戦後の研究成果を活力的に使用して、新しい日本の新しい民俗学研究を志向する関敬吾の講演は「関敬吾という生き方そのもの」であったと気付かせられる。即ち、如何なる状況でも研究をし、研究を思想とし、時代の闇に葬らない潔さ、貪欲な戦中戦後の日本人の研究を追求する姿がある。それを受け入れることの無い柳田国男を「先生の逆鱗にふれてしまった」という言葉で振り返る。

この日から関敬吾はライオンになった。その後「木曜会」に行くと粛清される立場になったという。柳田国男は無言。周りの会員が集中して質問する。柳田国男はじいっと聞いている。後藤総一郎は重ねて問うている。

「昭和三十年の『民話』ですか、柳田先生は民話ということばを使うことを怒ったのでしょうか。あれはどういうことなんですか。」

「もともと、先生から直接そういうことばを聞いたわけじゃないんです。虎の威を借りる民俗学者の二、三のエピソードが学会の機関紙で批判したんですね。おそらく木曜会あたりで、柳田先生のそういう意味での批評があったんでしょう。ある男は『民話』が出た時はえらくほめていたんですが、あとで彼らは逆のことを言っていました。」井之口章次君の批評のなかでは昔話は神話から分れてきたと説明しているんです」

井之口章次が『日本民俗学』第3巻第1号に「関敬吾著『民話』書誌紹介」をしている。が、それに対しての著者の激しい反論は「東のライオン伝説」関敬吾の存在感を際立たせた。反論の内実には次のような心境を読み取る。ことになろう。

「たまたまある書肆から頼まれて昔話に関する本を書いた。その前に一冊『昔話』という本を書いていたので、それで『民話』（一九三〇）という書名にした。是が民俗学会の若年寄たちの気に入らなかつたらしい。（略）彼らの興味は昔話や民話の内容や本質その研究方法や理論にあるのではなく徹頭徹尾言葉そのものにある。現在、民俗学は単にわれわれ自身の文化の過去および現在の諸形式とその変化を認識するだけではなく、これとやらんで多民族とその精神的素質、文化の特徴と生成を待蕪ことが要求される。それによっていっさいの人間に共通し、その結合の紐帯を知る時、そこに初めて自他の社会文化の区別が成立し、その原因にもとずいて、自民族文化の特徴を明確にするこ

とができる。(略)鳥賊の干したのを決して鯛といつてはならぬ。」

毒舌ライオンの思想にとつて、「民話」における言葉狩り的な感情論は論ずるに足るものではなかったのであろう。

しかし晩年であつたが、依頼された本を持つて駒澤大学の大学院生の女性と共に閨家を訪問したことがあつた。駒澤大学の桜井徳太郎ゼミの院生であつたが、『民話』に関わる荒寥たる記憶が甦つたらしく、「東のライオン」らしい激した物言いをしてゐた。同行した女性は涙ぐんで聞くことになつてしまつた。

関敬吾唯一の弟子・野口武徳の指摘するように「柳田に対して直接学問上の理論的抵抗をし、柳田を批判する者が学界の内部にいなかつた。」「日本民俗学の親であり創始者である柳田に対する抵抗あるいは批判、のみならず学会の会員相互の間から、論争あるいは批判らしい批判というものはなかつた」<sup>9)</sup> 状況において、昭和二十四年の関敬吾「和歌森太郎の所論に關係して」の「民俗学方法の問題」<sup>10)</sup>における堂々たる批判は見逃し難い。講演での柳田国男の逆鱗問題以来、関敬吾は「木曜会」を離れた。しかし、昭和三十三年の『講座社会学』の「民俗学―歴史・課題・方法―」をもつて、優れた語学力で、民俗学にヨロツバと対応する学への窓を開いて行つた。ライオンのライオンたる業績である。それは柳田国男の昔話研究とは一線を画する「昔話の社会性」を研究した先駆者としての関敬吾の存在感を読み取る磁場に違いない。

菌に衣着せぬ物言いは「若年寄」「鳥賊」の言葉にも表れているが、池田弘子の『日本昔話集成』の無断英訳事件にも明示される。誠に「ライオン伝説」が甦つている。『関敬吾著作集8』「民俗資料の問題」にその折の心情やフィルムを通して読みにくい文字確認をした様子など経緯が記される。

「ドイツの友人から君の著作のアブストラクトがFFCの一冊として刊行されているが知っているか」という手紙を受け取つた。自分に断わりも無く英訳して博士論文にする池田弘子に向けた激しい叱正が記されている。「九州の漁村ではカンダラという慣習がある。漁獲物はすべて竜宮様のもだからと、魚をくすねることである。しかし、いったん計算して記帳したら、いかにカンダラの常習犯といえどもとらない。それを敢えてすれば泥棒である。文章問題で言えば剽窃であらう。この(池田の)事件はカンダラによく似ている。このフラウ・ドクターの所有観はカンダラ常習犯以下である」<sup>11)</sup>

誠に手厳しい。先頃、ハワイ州オアフ島に転勤した刀根卓代<sup>12)</sup>から「池田弘子をよく知っている方がいるが、何か聞いてみたい」とはないか」と電話があつた。関敬吾の「カンダラ」の言葉を思い出した。「ライオン伝説ここにあり」の迫力が忘れられない。

池田弘子は柳田国男が選んで『日本昔話名彙』の基礎作業のために日本放送協会に現在で言うところのアルバイトで送り込んだ女性グループの中の一人であつた。関敬吾は東京帝国大学司書を辞職して、柳田国男の命令で日本放送協会囑託として「日



本昔話名彙」「日本伝説名彙」の基礎的な資料収集を始めた。その指揮の元にカード作りが始められた。その仕事は池田弘子、石原綏代、丸山久子ほか女性民俗学研究会の何人かがカード記入をしていた。その昔話の刺激を受けた池田弘子がアメリカに留学、ステイス・トンブソンに師事、インディアナ大学で博士号を取得した。それに対して関は「アメリカ大学では一つの分類案にしたがって、昔話を分類するだけでドクターがもらえるものかと感心すると同時に驚いた。自分の著作が無断で使われていたことは外国人によって知らされた」と記す。その池田弘子について記憶を辿る時、「ライオン伝説」がよみがえる。烈火の如く怒りを顕にされたのは次の記載であった。

「F F C 209に関敬吾に断わりも無く「A Type and Motif Index of Japanese Folk-Literature by Hiroko Ikeda Helsinki 1971」

ところで関敬吾が初めてF F C誌を知ったのは東京帝国大学図書館にあった、関東震災復興のためにフィンランド政府から寄贈された図書のかなかにF F C (Love Feflows Communications No 1-50) という震災の年の刊行物があり、アールネの「メルヘン・タイプ目録」を見た時であったという。早速東京帝国大学が取り寄せた。世界情報に敏感な学問の先覚者としての自負が強く関敬吾の学問を支えた分類理論に対して、池田問題はその自負の根源にも関わるものであった。その池田弘子が、日本民俗学会の一九七五年「柳田国男生誕百年シンポジウム」に参加し、アメリ

カ人としてスピーチをした。「あれは間違っている」と池田の「昔話と伝説定義・分類は国によって性質のずれが生じる。柳田におけるそれらの研究がなかったら、日本民衆史は手掛りを失っていた。民族は動かなくとも文化は動く」の発言に反応していた。その折のカンダラ池田弘子に対する「ライオンの怒り」の記憶はいつまでも私の脳裏から消えない。

### 三、折口信夫との交わり

「父・関敬吾が若いころ折口信夫に師事しまして、そのとき戴いた名前だと聞いております。」東京学芸大学の講演で御子息が「信夫」というご自身の名前由来について話している。折口信夫に関敬吾が師事したことは、あまり知られていない。御子息は昭和十四年生まれである。或る日、私が出羽地方の出身だからと、「出羽の作品が載っているから」と、折口信夫から贈られた『水の上』(一九四八 好學社)を頂いた。私は「折口信夫と関敬吾が親しかった事実」その意外性に驚いたものである。

しかし関敬吾の書齋には折口信夫から贈られた書物が並んでいた。その出会いについては「柳田先生の書齋でカードを写させて頂いて夜になり、帰ろうとしたら来客があって、声をかけられた。その人物が折口信夫さんであった。その後「桃太郎誕生」の講演会でも会った。初対面のその時はドイツ・ロマン主義のことを聞かれたと記憶している。その時はホフマンスタ

ルの新ロマン主義のこと、作品「痴人と死」を読んでいたし、大学教授と名を連ねて「ホフマンスタールの人物研究」を論文集に書いていたので、その話をした。折口信夫さんは（ホフマンスタールについて、息子が自殺して葬儀の最中に脳卒中で倒れ亡くなった話）にたいそう興味をもった様子であった。それから会えば話をするようになって、本を頂くようになった。「旅と伝説」で名前だけは知っていたが、読んでいなかった」という記憶を述べている。

國學院大學文學第一研究室には折口信夫の大きな写真が飾ってあった。師（白田甚五郎）は「柳田の学問を父とし折口の学問を母としている」が口癖であった。共に「実感実証」が学問の道と教えがあった。その折口信夫と関敬吾が親しく交わったと知り驚きであったが、初対面がドイツ・ロマン主義の話と知り思い当たることが一つだけあった。もしかして、芳賀矢一の事ではないか。國學院大学校歌の作詞者・芳賀矢一はドイツに留学している。その芳賀矢一の「文献学」批判者としての折口信夫については在学中に耳にしたことであった。その折口信夫にとってホフマンスタールの研究をしていた関敬吾との会話は意味深いのであったに違いない。関敬吾は読んだばかりのヘルダーやドイツロマン派と交流したグリムの話をしたことを記憶していた。

私が師（白田甚五郎）の導きで知るところによれば、芳賀矢一は「国学」についてドイツで学んだ「文献学」がそれに該当するという見解をもち、日本の新国学の復興を待ち望んだとい

う。そして『国民性十論』を出版した。

そこで注目したいのは斎藤英喜著『折口信夫』が指摘する「芳賀矢一がドイツで文献学に傾倒したのは、ドイツ・ロマン派すなわちゲルマン民族の独自性を強調した事と不可分にある。『国学』は日本民族の独自性を強調する学問にほかならない」という見解である。「古代人の思考の基礎」で折口信夫はその芳賀矢一『国民性十論』批判を書いている。

「芳賀先生の『国民性十論』以来、日本の国民性と言へば、よい処ばかりを並べてゐるが、事實はよい事のみではない。もつと根本に遡って、国民性の起つて来る周囲の法則、民族性の論理、即、古代理論の立て方を究めなければならぬ。」<sup>14</sup>

藤田徳太郎の弟子であった師（白田甚五郎）も、古代理論に心寄せつつドイツの学問情報に関心をもつて聞いたそうである。木曜会の写真には関敬吾と並んだ師の姿がある。折口信夫が関敬吾へ接触した底流に国文学者らしい、ドイツへの関心の高さがあったものとみられる。

関敬吾が「ライオン伝説」の主になる僅か前に、忘れられない思い出があった。関敬吾にとって、それは思い出すたびに心が震えるような、甘やかな記憶であるという。息子に信夫の名前を頂いたこともあり、折口信夫の愛息戦死の報には特別なものがあつた。ある日、柳田国男が折口信夫との対談を話題にした。それは何とも心和むものであつた。昭和二十四年の春、関

敬吾は柳田国男と折口信夫の対談の世話をしたという。硫黄島で愛息を亡くされた折口信夫を慰める柳田企画であったので、深い気持ちでお悔みを申し上げた。折口信夫に国文学を学びながら関敬吾が知る限りの外国民族情報を伝える交流は柳田国男には内密にしていたが、それを既に承知であったようで驚いたそうである。民俗学会講演事件から関敬吾は岡正雄、牧野英などの民族学会に所属するようになり、折口信夫との交流も気遣うこともなく、ヨーロッパ・アメリカ情報について話しあった。その意味から折口信夫遺稿「民族史観における他界観念」は「関敬吾伝説」的には誠に意味深いものに違いない。

## 注

- (1) 出版の話は白紙に戻った。後年石井正己氏の御配慮を頂いた。アザトウスキー著、関敬吾訳、野村敬子筆録「あるシベリアの昔話の語り手」石井正己編『植民地時代の東洋学 ネフスキーの業績と展開』二〇一四 東京学芸大学
- (2) 石井正己研究代表者『国際化時代を視野に入れた説話と教科書に関する歴史的研究』二〇一四 東京学芸大学
- (3) 関敬吾「あったとさ」の思い出」山田貢『越後の昔話 あったとさ』一九七七 文化出版局
- (4) 野村敬子「ますらたけおの昔話」『女性と経験』一六一九一九一 女性民俗学研究会
- (5) 関敬吾編『全国昔話資料集成21 高原半島昔話集』一九九七

岩崎美術社

- (6) 関敬吾「『日本民俗学入門』の思い出」『民間傳承』第四十七巻 第三号 一九八三 六人社。皮肉たっぷりなライオン伝説を味わうことが出来る。
- (7) 「後藤総一郎との対話テープ抜き原稿」一九七四 遠野博物館所蔵
- (8) 丸山久子が柳田邸で戦時中のアジア資料を燃していたことなども柳田の敗戦処理の一つと考えられる。
- (9) 野口武徳「解説」『関敬吾著作集第八巻 民俗学の方法』一九八一 同朋社
- (10) 関敬吾「山口麻太郎・和歌森太郎との論争」『関敬吾著作集第八巻 民俗学の方法』一九八一 同朋社
- (11) 関敬吾「民俗学資料の問題」『柳田民俗学をいかに学ぶか』注(9)に同じ
- (12) 刀根卓代「池田弘子―女性民俗学研究会の先達」『女性と経験』二〇一九 女性民俗学研究会
- (13) 斎藤英喜『折口信夫』二〇一九 ミネルヴァ書房
- (14) 折口信夫「古代人の思考の基礎」『折口信夫全集3』一九九五 中央公論社

(のむら・けいこ／東京都)